1980年代の「恵那の教育」の到達点（3）

－民教研機関誌『人間・生活・教育』を中心に　その3－

森　田　道　雄

＜承前＞

前回に書ききれなかったことを補足しておく。というのは，あの81年1月の石田報告と坂元による2回の講演は，内容的には非常に充実した問題提起を含んでおり，このあと取り上げる石田による生活綴方実践を励ますための総括的な講演「恵那の教育と生活綴方－過ぎたこと，いまのこと・あれこれ」（第2報告という。『人間・生活・教育』17号所収）では，扱ってない重要な問題が取り上げられているからである。

すでに前号でおおよその問題の輪郭を示しておいたが，子どもが書けなくなっている状況が，多面的に分析されており，あえて整理すると①教師の「教育の自由」が圧迫され，子どもが「自由」に書ける環境が破壊されつつあるという問題，②子ども自身の「自立」しきれないなかで，問題が見えず書くべき内容が希薄になっているという問題，③たとえ書いたとしても，書かれたことが「子どもをつかむ」には不十分な表現，内容になっているという問題，④書かれた内容をしっかり受けとめるには子どもと作品の見方を変える必要があること，などであった。今回補足すべきは，その問題把握の中身の補充とともに，それが次のステップにどういう意味を持ったのかという分析である。

まず，とりわけ坂元講演では，2回の内容に当然重複があるものの，論点については二つをトータルでとらえることで全体が把握できると思われるほど，練り上げられた内容になっているので，前回の紹介ではあまりに簡単すぎたことになる。

④子どもの「重荷」と教育実践の二重の課題

坂元第1講演には，次のような箇所があるが，ここにいわばキーワードが示されている。

「今日の教育実践を私たちが考える場合，一体何を中心に見ていかなくてはならないか，という問題が出てきます。結論的いうと私たちは教育実践で二重の任務を負っているということになるだろうと思います。‥‥ひとつは，子どもの発達のひとつひとつの段階に相応しい人間的な重荷を子どもに背負わせるということ，もう一つは，そのなかで，彼にふりかかってきている非人間な重荷の本質をわからせそれから，それを乗り起えていく見通しをわからせるということです。」[1]

この引用箇所には誤字もあるので，書き直しが施された『現代の子どもと生活綴方』の方で以下の引用をおこなうことにする。

坂元は，書き直した方の論文では「人間的なものを取り戻すために」という副題をつけ，まず，作品の表現の志向性（立場）やリアリティが弱いことを指摘する。次に，そうした自己表現の弱さの社会的基盤を分析してみせたあと，さきほどのような内容の箇所が出てくるのである。

それに至る前半部分の要所を示しておく。

綴り方の例として「私は口が悪い」と「ガラス割り」の作品批評をして，「今日の綴方の人間的葛藤の弱さは，こうした作品に象徴されるように，なによりも，身体と感情の志向性と現実認識の弱さの相乗としてあらわれている。そして，身体・感情における志向性の弱さは，行動と表現の「めんどうくささ」もいちじるしい傾向として，また現実認識の弱さは，ものごとをありのままに見る眼の弱さ，ありのままに表現できない弱さとしてあらわれている。しかし，さらに，重大なことは，さきの作品にも見られるように，こうした表現をしている子どもたちが，すでに「人間的なもの」

からの疎外，人間的な関係の切り裂かれを経験し始めているという事実である。しかも，子どもは，その非人間的な重みを感ずることなく，事態に巻き込まれつつあるのだ。」[2]と，指摘する。

「今日，子どもの自己表現の弱さをひきおこしている一連の事実と，それにもかかわらず彼のうえに非人間的におおいかぶさってきている社会的現実とはひとつにつながっている。それは子どもを，その発達段階にふさわしいかたちで，自立させないまま，いっきょに，現代社会の非人間的な矛盾へと，つきおとしていく非情なまでの事態である。‥‥子どもは発達にふさわしい人間的重荷をていねいに背負わされられないまま育てられ，一気に非人間的な関係のなかに投げこまれていく。重荷を人間的に背負うという，子どもの人間形成にとって不可欠の条件が，そこではいずれもかたちを変えてうばわれているのだ。‥‥」[3]

「子どもは人間的な重荷を人間関係をとおして身体に刻みつけるがゆえに，人間的な感情と認識を発生させ，発達させ，さらに，それらをとおして，もう一人の自己と対話していくのだ。しかし，子どもをめぐる今日の危機的状況は，彼らに人間的重荷を背負わせないことによって，その自我を人間的に形づくっていかない。それは，身体と感情のなかに自我を充分に刻みつけていかないし，それらを充分に認識に結びつけていかない。今日の状況は身体と感情の動きが，言葉として一般化されることを想像以上に困難にしている。‥‥だから人間的な重荷は，身体と感情に刻みつけられないばかりか，言葉にも刻みつけられていかない。そして，言葉に刻みつけていない自我がどんな自我か想像に難くないだろう。子どもはこうした状態のまま，人間関係の切断と交流の喪失という非人間的な重荷を背負わされていくのだ。」[4]

これらの坂元の分析，つまり恵那の子どもの作品を読み込むその「切れ味」は鋭く，また，深刻である。似たような表現が繰り返され，語尾は断定調で迫力がある。そのあとに，「よりちゃんたちがにくたらしい」という中学1年の作品が一部紹介されているが，それは，三，四〇人の2年生の上級生から「死ね，たあけ，あほ」とののしられるが，おしゃれをしたからなのか，好きな子がいるからなのか，その理由が作者にはわからない。ただ「よりちゃん」たちが，3年生からにらまれているからなのか，ということに思いをめぐらしている。しかし理由がわからず混乱し，恐怖で学校に来るのもイヤだと，結んでいる作品である。

坂元は，この作品に対して，「この綴方のもつ現代性は，作者がこうした不安な世界に言葉の表現を与えようとして必死に努力している点だと思われる。作者は，恐怖を対象化しようと苦闘している。この綴方には不明なことがらが多いにもかかわらず，そこから汲みとることができるのはそうした筆者の苦闘の深刻さである。‥‥作者は，二年生が自分を憎むのは，彼女たちが三年生から憎まれているからにすぎないのではないかと考えはじめている。そして，自分を憎む上級生がいてもそれを本気でそう思ってはいないと考えている。作者は，まだ，そのことを，事実でもって確かめてはいない。しかし，そこには，心の矛盾を，自分に引きうけようとする傾向が明らかにみてとれる。」と，評価している。[5]

この中学生の綴り方は，わかりにくい内容であり，また，作者自身も問題の本質も打開の方向もわかっていない状態で書かれているが，書かれたことの意味を問うことで，「生活実感」を抽象化することを通過しなければ，リアルな認識に到達しない，という。つまり，この綴り方における言語表現とは上級生から差別を受けることで生じた不安，恐怖などを一般化し，その真実を明るみに出すためのものである。そこにある非人間的な人間関係を変革するためには，この表現のプロセスが不可欠だと坂元は力説する。[6]

また別の所では，能力主義社会のなかで，「底辺校」といわれる高校の生徒たちが，自立のために，どれだけきびしく親と対立し，葛藤のなかで苦しんでいるのかを，岩村高校の文集「へぼ」を例に，指摘している。

坂元は，ここで「教育実践の二重の課題」という言葉を，かつて「生活の二重性」として指摘したこととは違う意味で用いているのはいうまでもない。「生活の二重性」は，生活綴方が「ありのまま」を追求するうえで，ありのままの事実が，様々な問題関連のなかで，肯定と否定，タエマエとホンネ，愛情と憎悪，連帯と孤立，などの相反する，相矛盾する側面をもっており，否定的だからこそ「肯定」的なものへ転化する動因として見なければならないということでもある。要するに，今日の「物象化」された生活は，その疎外的な状況に身を委ねざるをえないが（金銭関係でつながる人間の諸関係は否定できない），その内実がわからないけれど，委ねることによっては自己が確立できない（金銭関係に還元できない人間的な感情や他人との関係），という矛盾的なものという認識である。

坂元の「まとめ」は，三点に整理されて提起されている。すなわち，1「人間的な課題を文化の獲得をとおして，子どもの身体と感情の刻みつけていくこと」2「それらに言葉－名辞と命題を与えるようにすること」，3「さらにそれらをとおして，かぶさってくる非人間的な重荷に子どもが耐えるようにし，同時にそのなかで，その本質を明らかにしていくようにすること」である。とてつもなくむつかしい課題であるが，「生活綴方教育は，なによりも，子どもが人間的な課題を，どんなにえらくてもやり遂げていく場面をつくり出し，それを彼らに綴らせることを目ざさなければならない。‥‥こうした努力は‥‥などの作品の提出にもあらわれている」，と坂元はいくつもの作品例を紹介している。[7]また，実際に参観した授業の内容にそくして課題を提起してくのである。

ここでのまとめとしては，石田報告や坂元講演は，綴り方が書けなくなっている根元の問題を洗い出し，書けない基盤にある「生活の抽象化」あるいは「物象化」のなかから，子どもの発達の必要にそくして人間的なものを取り戻すためには，子どもの生活に「重荷」という表現で，自覚的に見られて，取り組むべきものをつくりだしてやること。それを表現する葛藤にこそ価値があり，本来の学びがそこに生ずる，というようなことを提起したわけである。それが作品研究という具体的な場面で語られる限りでは，難解ではないと思われるが，しかし，実際の教師一人ひとりがそういう指導ができ，子どもの作品が書かれるだろうか。書かれた表現から，そういう問題を読み込むことができるのか，ということになると，なかなか大変な課題提起ではなかったろうか。

当時においても（今読み返してみても），この1981年1月におこなわれた三提案は，理解することと自体，そうとう骨の折れる問題提起だったと言える。もうすこし，わかる形で出せなかったのか。そういう重さを感じてしまう。

さらに，時間を進めることにしたい。

※　文中にも紹介した『現代の子どもと生活綴方』は，ほかにも高校教師の桑田靖之「泥まみれの戦士たち」の実践を取り上げた講演，「物象化した人間関係」のなかでの「気遣いの表現」を取り上げた講演なども含まれている。この本は，主に80年代初頭から前半期における生活綴方実践の課題を追求しており，それとしてテーマをたてて吟味する必要性を感ずるが，ここでは深入りしないことにする。ただ，坂元の70年代に書かれた前著にくらべると，引用される作品解釈も，社会的分析もむつかしい内容が増えている。

3　80年代前半期－きびしい攻勢の状況と文集『生活綴方恵那の子』

80年代の前半期は，子どもがつかめない状況と，子どもにあらわれる様々な事態について，必死に「がんばる」教師の姿と同時に，管理体制の強化が職場の「多忙化」と教育活動の「形式化」を進め，さらに一部の親の意図的な学校批判が輪をかけるという，いっそう実践上の困難が進行した時期と言える。今回は，80年代前半期の状況を，実践の

みならず，学校を取り巻く状況にどう教師たちが直面していたかも取り上げる。

＜80年代の実践課題をどう展望したか－80年代初頭の学校と地域の状況＞

前稿では，石田報告（81年1月の民教研集会16号所収）を取り上げながら，学校と地域の状況をあつかったところを省略したので，あらためてその点を確認しておく。上に端的に述べた「実践上の困難さ」は，あのような一般的な表現だけ伝わらない。というのは，「恵那の教育」がさまざまな政治的・行政的な「圧迫」を受けているという状況は，他県の教育的状況から類推できるものではなく，特別な方法と雰囲気を伴っているからである。したがって，「恵那の教育」の評価について議論では，この特殊な「環境」をあまり考慮しないでおこなわれる傾向が強いが，それは評価の検証を不正確にすることになるし，また恵那の実践や運動それ自体を一般化するうえの困難さを意味することにもなる。

この石田報告は，「反動化推進県岐阜県に現れている攻撃の厳しさ」という項で次のように述べている。

すなわち，「岐阜県政としての教育正常化政策の進行というものには目にあまるものがあると思うわけです。県議会では一昨昨年の教育正常化決議に引き続いて，昨年度は教育基本法の改悪決議を自民党だけの多数採決で行うという中で県行政が先頭をきってその推進者になってきている。」「高山の県ＰＴＡ連合会の研究会の席上で上松知事は愛国心決議（教基法改悪決議）にからんで「戦争のない世紀はないんだ」といういい方で愛国心決議は当然戦争を予想しているし，愛国心教育は，戦争のための教育なんだという事をはっきり公言されている」状況がある。さらに1980年度の栃木国体において，県選手団長である上松知事が天皇が開会式で退席する際に「天皇陛下萬歳」を三唱したというエピソードにふれ，「岐阜県は反動化を推進するモデル県」であり，「私共の上におおいかぶさっている様々な困難というものが今日，全国の他と比べて，比較にならない厳しさをもっているのも又当然なんだとも考えられる」と述べている。

※　石田は，首相の靖国神社公式参拝を下から決議させていくという自民党の方針にしたがって岐阜県の市町村で54自治体議会が行ったが，昨年末段階の集計数の全国で550余のうちの十分の一を占める，とも述べ，元海軍兵学校のある「江田島」詣でといわれる高校の修学旅行14校も，次の愛知の3校にくらべ突出しているとも指摘している。[8]　1980年10月7日の岐阜県議会の教育基本法改正決議は，形の上では「日本の伝統を守る会」の陳情を自民党議員が紹介して提出されたものだが，知事が先頭に立つという意味でもたしかに突出した動きであり，内容的にも「日本の歴史と伝統を尊び，国を愛する心を養う」語句を条文に盛り込むことを要望するものであった。

そして，「最近目立つこと」として，「子どもの登校拒否を親が強要する」ということを取り上げている。

「子どもと先生との間に小さなトラブルがあれば，それを理由に学校へやらせないとか，学級内で子どもの相互批判が行われれば，それは特定の子どもに対する集団的なリンチなんだ。だから子どもを学校へやらせないなどの問題にしていくわけです。‥‥様々ないいがかりをつけながら登校拒否という事を親の立場から戦術として利用し，実際に登校拒否の事態をつくりだし，それを社会的・政治的にひろげることで，教育的，社会的な混乱をおこし拡大していくといった状況が見られます。そして社会的な混乱として事態を悪化させることで学校教育の民主的な管理や行政に対する批判を社会的に強めさせ，責任をとらせるところまで追いこむことによって，管理や行政を非民主的で，反動化推進の道具に変質させ上下関係の強化によって，権力的にでも民主教育を破壊するための様々な手だてがとられているわけです。」[9]

以前から，「恵那の教育」に対する批判の中心は「学力が低い」ということであった。業者による模

擬テストや高校入試の点数が「低い」といういい方であるが，とりわけ高校入試の学校別の点数をあげて地域の学力低下を批判するやり方について，次のように述べている。

「高校入試の点数は外部に持ち出して公表したり，政治的に利用したりすることのできない性質のものであるにもかかわらず，どこの高校が何点で岐阜県の中で何番目だといういい方をして‥‥宣伝するのです。けれどその資料は私たちには見るすべも何もないのです。実際に低いという一方的な宣伝があるだけで，その実態をその地域の教師や父母は誰も知る事ができないのです。利用しうるものだけが勝手に利用し得る資料で攻撃を展開するという事の中には，県行政が先頭に立って攻勢を強めるという反動的モデル県の状況があらわれています。或いは生活綴方を行えば偏向教育だということの中には，生活綴方といえば盗みを認めるものなんだ。盗んだことを綴方に書けばそれがいい綴り方だというように，ひどく短絡し，歪曲してそれでもって生活綴方というものを一切代表するような中傷を強めている事も事実です。」[10]

また，ＰＴＡ人事において「まじめな親を敵視」し「役員を何とかして反動的人物でのっとる意図と工作が強められ」ている。さらに「教師への圧力が一層強ま」り，「教師は多忙に追われ，教育実践に確たる自信を持ちえないような状態のまま，毎日追われつづけているといった状況が昨年はひどく続いて」おり，「文句をいわれないように目立ん事をやる。下手なものでも出して悪く云われては困るから，悪くいわれないようにやるということで，例えば学級通信も出さない方が良い。というようないい方の中にも同様が様々あらわれている」という具合である。[11]

子どもの状況については，次のように述べている。

「子どもたちの中では，綴方がかけない状況が目立っているように思います。それは，ものが見えない，自分の頭で考えられないということが一層深刻化して‥‥綴り方が書けないという事は単に綴る事をしないというだけでなく，綴っても綴方になっていないという状況の問題としていうわけですが，いわゆる内面の真実が客観化されないということです。‥‥何と何と何をしましたという事はいえても実際にそれが自分の内面で重くのしかかっている自分の人間というものを，その問題を通じて表すことができないと同じような状態として生活綴方が書けない問題が深刻に存在しているように思うのです。従って勉強の方でも，学問だとか科学だという事に対して真に興味のない生徒が増加していますし，絶えず目は友だちの動向を見ているだけで，実際にどう人間として生きていくのかという生き方が自分の視点とならない子どもの状態が目立っています。‥‥それらの状況は同時に一方で，無気力を増加させて，意欲的でない生活に子どもたちをひきずり込んでいく状態にもなってあらわれていると思うのです。」[12]

なおここで，以前の号に戻る形になるが，こうした学校や地域の状況説明を補強するための材料をいくつかあげておこう。

一　民主的な教育実践や父母との交流，子どもたちの交流をあげ，「これらに対して，不当ないいがかりや干渉，圧迫がたくさんおこなわれましたが‥‥‥ある人々の会合の中で「恵那の教育というものは徹底的にこわしてしまわねばならぬ」とか「親を使って攻撃させ，混乱させることが大事だ」といわれ，更に「人事で困らせてやることだ」とまでいわれていたと聞きましたが，爛熟にふさわしいあがきであり理不尽さであるとしかいえません。」[13]

二　この同じ号に吉村義之による実践記録があり，学級づくりが困難だというなかで，遠足の直前に怪我をして自力では参加できない女子の話が出てくる。学級討論で，行った先で釣りができるかどうかで時間をかけ，その子の話題が出てこないというエピソードのなかに，家庭訪問での親の話が出てくる。というのは，むりやり教師の権限で議題にさせ，参加できるように車に乗せてつれていくことになったが，遠足に行った先でその子がうれしくなって痛みをこらえて動き回ったことを子どもから聞いた親が，その子が遊び回ってけしか

らんと怒っている，というのである。みんなと楽しく遠足が過ごせてよかったと思っていた吉村は，こういう親の反応にとまどってしまった，という。[14]　政治的な攻勢とは違う次元の親の状況を示すエピソードであるが，その怪我をした女子への差別の問題でもあり，親の意識も学級で配慮しあって弱い子を助けるというのではなく，自己中心的だという非難が出てくるほど，弱い子どもの存在に親子共々冷淡になっているということなのである。

三　教師の自殺を取りあげたあとで，「この間も岐阜県の各地の方のお話を聞いておったときに，夏休みが一日もない，いわば家庭研修という名での教師の夏休みが一日もないといった学校がＳ地方ではすでに存在していることを知りました。何が理由かというとあるＰＴＡの役員が「先生たあは高い金をもらって，夏休みがあるでええなぁ。」ということをある場所で発言した。それを校長や教頭が耳にして，親がそういうふうに思っとる。社会がそういうふうに教師を見ておる限りは，それに安閑として休んでおるわけにはいかん，といった短絡的な受け取り方，教師に対して夏休みを全部やめにしてしまう。家庭研修を一日もありませんというふうな事を申し渡した。‥‥何をしておるんだというと，今週は理科の備品を整理する。来週は図書を整理する，というような形でいくらでも仕事は上から探しだしてきてやる。子どもは全くいないような学校へ，教師は毎日行かざるを得ない。という様です。」[15]

四　四月以降みんなが異口同音に「忙しい，ほんとに忙しい」という「ゆとりと調和の名による重労働体制」と特徴づけて，「ある町では，「やることというのは全部指導要領というものに書いてある。だから，それを読んで，よう研究して，授業研究の教案を書けばいいのだ。ほかのことには，いっさい目を向けることはいらん」という意味のことが言われました。「心と体なんてことは，あれはお医者さんの領域の仕事だ。そんなことを学校でやるなんてことは，もっての他のことだ。あれはお医者に任せておけばええことだ。学校では，教師は，心の問題は道徳の時間にやればいい。体の問題は体育の時間にやりゃええんだ」ということを教育長さんが演説されたということもあるわけです。指導要領の目標がすべてだと，そこを徹底していくことが，すべての場所で強調されてきたわけです。‥‥正常化の真のねらいが，指導要領の徹底化だというわけですが，それは，子どもたちが学校にいるうちは，登校してから下校するまでの千？時間を管理体制の下に置いて，子どもたちを目標に向けて組織していくということになるわけです。一日の生活が非常に細かく目標化されて，それを徹底的に守らせるという非教育的な姿が目だったのも，四月以降の姿です。」[16]

これらをさらに説明することは不要であろう。教師たちの動揺は，いわゆる戦後の生活綴方復興期の教師たちの大量退職によって，学校運営での主導権を失っていくことと照応していた。学校ぐるみという取り組みが困難になり，教育委員会や公立教育研究所が最終的な変質を遂げていったのも，この時期である。親たちは，そういう力関係の変化に影響を受けないわけはない。

＜文集『生活綴方恵那の子』の刊行＞

1981年3月に「恵那の教育」にとっては画期的な文集『生活綴方恵那の子』全5巻とその別巻3巻4冊の刊行が草土出版からあった。およそ十年間の作品の集大成といえるものである。これには，数十人の編集委員会が組織され，テーマ別に作品を選び出し，それぞれの巻の解説をつける作業がおこなわれた。それは，子どもの作品から学び直すことを意味した。刊行後は，各学校・地域で購入，普及の活動が展開された。

『人間・生活・教育』誌を中心において本稿を進めているので，その号数を追った形で書くと，二回あり，17号(81年8月刊)が，『生活綴方恵那の子』刊行を取り上げた最初になる。この「特集Ⅰ」では，宣伝パンフレットと5巻の解説がそのままリプリントされている。特集Ⅱの18号(81年11月刊)では，編集委員会のメンバーの座談会が掲載され

ている。以後の記事には，この文集をテーマにしたものはない。もちろん，生活綴方実践では，授業のいろいろな場面で必要に応じて作品が活用されていた。

70年代をあつかった前稿で，この刊行に関わる記述がないので，編集委員会が各巻でおこなっている「解説」をみることは有意義だが，本題の80年代の到達点を見る趣旨とは離れてしまう。したがって，ここでは最小限の言及，分析にとどめることにする。

17号の巻頭言に当たる最初の記事は「民主教育を進める自由を拡げよう「恵那の子」の普及と活用を！！」である。

一学期が終わった時点で「忙しかったがなにも成果らしいものが残っていない」「毎日叱ってばかりで，つくづくくたびれてしまった」という教師の声を紹介し，今の子どもの共通した傾向を，次のような現象としてあげている。「授業への集中力がない」「まともなことをいう子どもが浮き上がる雰囲気がある」「自分たちの問題をみんなで話し合って決めることが不得手」「興味の中心が学校外にあるように見える」とあり，「一種の“くずれ”ともいえる傾向」と特徴づけている。

ついで，教師の多忙化の原因として，行事の精選とか授業時間数の確保などという言い方で完全実施に入った「計画体制」だと，指摘している。こういう状況なかで，「「恵那の子」は，子どもにとっては，生活を見つめることを通して生き方を考えていくことを教えてくれる教科書として，父母や教師にとっては，子どもの見方を考えて子どもをつかむことを学ぶ教科書（子育ての本）として大きな役割を果たしてくれるものだという確信をもって，より多くの子どもと父母のなかに拡げ，自ら活用することが非常に重要な意味をもっていると考えられます」と，呼びかけている。[17]

文集『恵那の子』は，作品のテーマ別に編集されており，小学生から高校生までの幅で収録されている。高校での生活綴方実践は，「恵那の教育」が小中学校中心だった70年代前半までは，ほとんどまったく関わりがないといえるほどだったが，小中学校教員で組織する岐阜県教組と，県立学校教員で組織する岐阜県高教組が組織連携を強めるなかで，恵那地域では，76年に岩村高校の教員サークル「あすなろ」の会員が民教研に参加し始め，その教師たちのなかで急速に生活綴方実践がおこなわれるようになったという経過がある。桑田靖之「泥まみれの戦士たち」の実践は，『教育』年月号に記載され，1981年度教科研賞を受賞し，恵那の生活綴方に高校もあることを全国に知らしめることとなった。高校生が綴る文章は，さすがに小中学校での生活綴方の蓄積が生かされているという要素も当然あるが，「偏差値」で輪切りにされて学習意欲や生活意欲に問題をかかえた「底辺校」といわれる高校での実践では，ある意味で「仕切直し」の要素が強く，高校ならではの「生き方」を問う重みのある作品が特徴的である。この高校での生活綴方実践は，本来でいえば本稿でも対象とすえるべき価値のある実践だが，割愛せざるを得ない。（『人間・生活・教育』18号にある藤岡貞彦「青年の自立」という講演で，桑田実践への評価を含めて，当時の状況が伺うことができる。また坂元の論稿での高校実践への言及も増えていく。）

『恵那の子』第1巻は「るみ子とぼく」＜なかま・地域・遊び＞篇，第2巻は「自転車はおあずけ」＜家・くらし＞篇，第3巻は「いい日曜日」＜仕事＞篇，第4巻は「さんすうのゆびかし」＜学校・勉強＞篇，第5巻は「あとつぎ」＜自分・社会・いのち＞篇，という編集になっている。この編集の仕方と重点の置き方が，まさに「生活にねざし生活を変革する」恵那の＜生活＞綴方であることを示している。別巻には，丹羽徳子の「明日に向かって」の生活綴方実践が2冊の分冊で，また「編みかけのセーター」という親の文集に1巻があてられ，さいごの第3巻は＜理論・運動＞篇として，戦後の生活綴方復興以降の重要な資料，基調報告などが収録されている。この巻には，坂元忠芳の「解説」，「未来を語る生活綴方」が理論的な問題を総括している。

『人間・生活・教育』にリプリントされた解説は，巻末に「この本を読んでくださる父母の方々へ」と題されて，それぞれのテーマに関わる問題状況と，若干の作品を取り上げて評価の観点を説明する形になっている。どれも70年代から80年代初頭の問題状況が親を読者に想定してわかりやすく書かれており，その意図は明確である。とくに第1巻では，子どもがありのままの事実を綴ることの意味を説明し，それが交流されることを通して人間理解をふかめるという大きな意義があることを強調している。能動的な生活をつくりだすこと，そこから生ずる生活実感を客観化するために綴る過程が，深い教育的な意味を持つことが説かれている。2巻以降でも各テーマにそって生活綴方教育の意義が，教育活動全般に関わっていること，とりわけ「人間として育てる」ことに焦点化されているのである。

ここではこの親向けの解説文を，それぞれのテーマでまんべんなく説明することはやめて，当時，親がどう子どもと関わっていたかという問題意識に絞って解説文を読みとってみたい。というのは，「家庭や地域の教育力の衰退」といういい方がこの頃よくされるようになり，現にこの解説文にも「七〇年代に拡がった家庭の崩壊や教育力の喪失状態は，恵那の地域においてもたくさんみかけることができ」[18]というように，同様の表現がある。ここで問題なのは当時から決まり文句のように使われた「教育力」という，意味内容があいまいな言葉である。そして，この表現はかつては過程には教育力があったが今はなくなっている，という理解になるがそれは正しいか，ということである。

※　1999年出版だが，教育社会学者の広田照幸が『日本人のしつけは衰退したか』を著した。広田は「しつけ」といっているが，80年代後半以降さらに進んだとされる「家庭の教育力」の低下は本当かと問い，の社会的階層ごとの考察が必要なこと，昔の家庭や地域の状況は，イメージするほどでなく親（大人）は子どもに無頓着だったこと，「教育力」という言葉は子どもに対する社会の影響力の質的な変化が無視されるので死語にすべきだ，というようなことを主張している。

たしかに，親が子どもの関わる関わり方は近年その質はともかくむしろ濃密になっているので，簡単に衰退とか喪失というような言い方は避けるべきであろう。ただ，広田は「しつけ」をとりあげているが，子育てに濃密に関わる近年の状況をさして，昔の農村部の家庭には労働のしつけこそ厳しかったが，それ以外では放任的だったという結論には，簡単には同意できない。なぜなら，広田が批判するように「教育力」という意味では，たぶんそうだろうが，子育ての習俗や子ども集団の自己「形成力」に関してほとんど言及されていないし，昔の封建的な身分制度や差別構造が問題だとしても（それ自体克服すべき課題であることは当然だが），日常的な生活（子どもが関わる家事労働）が身体的能力や，生活知識を獲得するうえでのなんらかの「教育」的な意味までも，無視してよいか，ということである。広田は，たまたま1950年代の小川太郎と大田堯がおこなった中津川調査の，社会階層別の家庭の状況分析を紹介しているが，この「恵那の子」文集のような具体的な生活描写を資料として取り入れれば，もっと深みのある分析ができたのではないだろうか。

広田は，「家庭の教育力が低下しているのではなく，子供の教育に関する最終的な責任を家族という単位が一身に引きうけざるをえなくなっているのである。地域，すなわち伝統的な慣行や価値観を伝えた共同体は，戦前から次第に子供の社会化に対する影響力を弱めていき，高度成長期に最終的に消滅した。‥‥七〇年代以降，「教育する家族」が広がる中で，「学校が（わが子に）余計なことをやりすぎる」という批判にさらされることになった。地域共同体は消え，学校は「教育する家族」に従属させられるようになったのである。親たちは以前に比べてはるかに子供にさまざまなことを教えようと努力するようになっている。」[19]と結論づけている。これは，都市的な生活様式が優勢な地域で

の状況としてはおおむね妥当な解釈だろうが，少なくとも恵那地域の70-80年代を，こうした叙述で説明するにはそぐわない。逆に，恵那地域における家庭と子どもの状況は，生活綴方を通してより具体的に把握でき，そのことから，子どもに対する親の意志が，親の生活状況や人間観によって複雑なあらわれ方をしているように考えられるのである。

①「解説」からみる家庭と地域

まずは，文集の解説文から代表的な，子どもと家庭，地域の状況を示してみよう。第2巻では，次のような説明がされている。

「七〇年代後半から急増してきた親の声として「子どもがちっとも言うことをきかない」「子どもがさっぱりわからない」ということがありますが，それは同時に，「子どもをどうしたらよいかわからない」という家での教育方針不在のようすとなってあらわれてきたのです。／家庭は，子どもを養うことだけでなく，子どもを人間として育てる機能をもつものですが，七〇年代の家庭は子どもを人間として育てるうえでの教育力を大きく低下させたのもたしかです。それは先の教育方針不在というところに端的にあらわれていますが，親の子どもへの視点が，能力主義による学校教育の視点と同じ点数しか持たないという傾向がつよまり，子どもの天分を観るということが忘れられていたことにもよります。いわば，子どもにたいして家庭がたえず人間としての生き方を，基本的習慣や価値，行動様式として身につけさせたり，親の生きざまを通して体得させたりすることへの自信を失っていたといえます。」[20]

「生活綴方の教育は，生活の事実をありのままに綴ることによって，生活を認識し，意識することをだいじにしますが，七〇年代の学校では親や家族・家庭の生活をみつめさせ，そこにある喜びや悲しみ，苦しみや怒りを通して問題をとらえさせながら，それを生活の事実としてありのままに綴らせることをだいじにしました。それは，子どもの内面に生活実感としてとらえられている家庭の状況と問題を，子ども自らに具体的に客観化させることによって，自分の生き方を含めた事実を正しくみつめさせるところに，家族の人間関係や家庭の生活を考えさせ，自覚的に生活を創り出させる土台をおいたからです。けれど「よい作品（綴方）はよい生活からしか生まれない」といわれますように，子どもが家庭の生活に傍観的であったり，欲望充足だけに家庭の価値を抱いているなかでは，心を動かされることが少なく，綴ることが何もないという状態があります。また綴っても自分からはたらきかけた生活がないため，表面をなぞっただけで，深くみつめていない場合もあります。さらには，思い問題にぶつかりそれに立ちむかおうとしながらも，家庭内のことは恥部だとする考えが事実をありのままにみつめさせることをさまたげ，肝心の部分が客観化できないということもあります。これらは，子どもが家庭のなかに生きる課題をはっきりさせず，まっとうに生活していないことのあらわれでもありますが，七〇年代には，家庭を題材にした生活綴方の困難さのなかに，現実としての家庭状況の複雑さや深刻さが反映していたのです。しかし，子どもたちに，その生活の基盤である家庭や，愛の原点としての親子関係の困難から目をそらさせず，その現実を直視させることで，家庭の生活や親の人間のなかに家庭と社会の矛盾や発展の芽をとらえさせ，親をのりこえる人間の生き方をみつけさせ，本当の親の期待に応える家族の一員としての生活を生み出させなければならないと考えたのです。」[21]

文集には「ぼくにもっと話してほしい」という丹羽徳子学級（「明日に向かって」の前の担任）の作品が収録され，解説でそれにくわしく説明がされているが，「作文」としての文章表現にではなく，父親が職場でけんかしてやめさされはしないかと心配している子どもの心情と，その子どもがありのままに生活を見つめるなかで家族の一員として何が自分にできるのかを考え悩んでいる姿にこそ，価値があるとして紹介している。

「家からの逃避や，家庭内暴力，家族の刺殺など，七〇年代の家庭のゆがみや崩壊が，八〇年代

に入っていっそう進展するきざしがみられます。高度経済成長で荒らされ，破壊された家庭には，家族があっても愛や規律が失われ，集団としての社会的目的や生きがいが存在しない場合が多いのです。‥‥家族の人間的なふれあいを濃くし，その心をわかりあい，助けあい，愛しあいながら，家族関係をゆがめ，家庭を破壊する動きにたいし，子どもたちが家族の一員として人間的自立して立ちむかうよう，子どもたちといっしょに生きたいものです。」[22]

この「解説」の性格からも読者である親への呼びかけの文体になっているが，恵那の教師たちが「生活」綴方として何を求めて取り組んでいたかを端的に示すものである。生活に根ざすことは生き方の基本であるとともに，学習の基礎をも形成するわけで，「学校で学ぶ」という原則からはみ出た考え方ではない。むしろ，学校でこそ，あるいは教師として子どもに責任を持つからこそ，こうした教育観，教育理念に確信をもっていたと言うことができる。しかし，現実の家庭や地域の状況は，子育てにとってはさらに深刻さを深めていくのであり，それを克服する取り組みは，学校の守備範囲をはるかに超えるものであると言わざるを得ない。ある識者は，地域づくりという社会教育の実践がともなわなければならないという趣旨の批評を寄せていたが，家庭や地域への働きかけという点で，恵那の教師たちの活動が不十分であったとは，筆者は考えない。しかし，学校を支える地域の状況が，かつての「共同体」ではなく，子育てや教育に対する価値観や，政治意識において分裂していくなかで，対立する陣営に対して有効打をもてなかったという点は認めざるをえないだろう。(②は次号に続く)

(2005年5月23日受理)

＜注＞

1『人間・生活・教育』16号　p.114
2 坂元忠芳『現代の子どもと生活綴方』p.9
3 同　p.10
4 同　pp11-12
5 同　p.14
6 同　pp15-16
7 同　pp19-20
8『人間・生活・教育』16号　pp7-8
9 同　p.9
10 同　p.10
11 同　pp11-12
12 同　pp11-12
13 79年1月冬季集会石田「あいさつ」『人間・生活・教育』7号　pp4-5
14 吉村「やる気」『人間・生活・教育』7号p.102
15 79年8月夏季集会石田「あいさつ」『人間・生活・教育』10号　p6
16 80年8月夏季集会春日井報告『人間・生活・教育』14号　pp18-9
17『人間・生活・教育』17号　p.5
18 同　p.90
19 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』(講談社新書1999) pp127-8
20『人間・生活・教育』17号　p.90
21 同　pp91-3
22 同　p.98

Development of the new educational practice in Ena area in the 1980s (3)

MORITA Michio

This study tries to research " Educatian of Ena area" implied the new educational practice. It showed us what and how to educate children in crisis of human development in the 1980s .